

写真1 アニマルセラピー
と同様の効果が確認され
ているセラピーロボットの
「パロ」

「介護ロボット」の 普及推進に取り組む

公益社団法人かながわ福祉サービス振興会
介護ロボット推進課長

関口 史郎 (せきぐち しろう)



介護ロボットって何？

「介護ロボット」のイメージは人により大きく異なります。衰えた足腰を支え歩行を助ける器具、介護施設の職員を腰痛から守る移乗用のマシン、あるいは鉄腕アトムのような人間のかたちをした万能ロボット…。介護ロボットは私たちの日々の暮らしに浸透しておらず、まだ見たことも触ったこともないという人がたくさんいるのが現状です。

介護ロボットの普及に取り組んでいる私たちが最初に直面する壁は、この言葉自体に確たる定義がないことです。そこで私たちは次の3つに分類しました。移乗・入浴・排泄などを支援する「介護支援型」、歩行支援・リハビリ・食事・読書などを助ける「自立支援型」、癒しや見守りなどを行う「コミュニケーション・セキュリティ型」です。このように一口に介護ロボットと言っても、実は目的や用途によりいろんな種類があることを知るだけでも大きな前進だと思います。

まるごと1軒介護ロボットに

介護ロボットが思ったほど普及しない理由のひとつに、値段がとても高いことが指摘されています。たと

えば、認知症の人に癒し効果が認められるセラピーロボットの「パロ」(写真1)は35万円(定価)です。こうした介護ロボットと介護専門職の皆さんの接点をつくるために、メーカーからロボットを借り上げ無償貸し出しをしたり、有効に活用するための人材育成を目的に研修会を開催するなどの普及活動を、私たちは自治体と一体となって行っています。

将来の介護ロボットの姿を考えた時、その方向性は、ロボットが家に組み込まれていく、ということだと思います。現在は移乗、歩行支援、癒しというように、介護ロボットの大半は単体・単機能で存在します。ですから人によっては、数台の介護ロボッ

トを保有しなければなりません。それではお金がかかる場所もとる。ならばいっそのこと、家にロボットの機能を組み込んでしまおう、という発想です。

たとえばトイレや浴槽が最初から介護ロボット機能を備えている。監視センサーが随所に設置され、危険な行動や不要な外出を制御する。家族が外出先からネットワークを通じて様子を確認し、離れた場所から安心させる言葉をかけたりできる…。こうした介護ロボット機能を集大成した住宅が登場するのではないかと考えられます。決して夢物語ではありません。さほど遠くない将来に実現するかもしれないと期待されています。



HAL@福祉用



Profhand



PALRO



ベッドサイド水洗トイレ

HAL@福祉用:

身体機能を改善・補助・拡張することができる、世界初のサイボーグ型ロボット。身体に装着することで、「人」「機械」「情報」を融合させ、身体の不自由な方をアシストし、いつもより大きなチカラを出し、さらに脳・神経系への運動学習を促す。

Profhand:

脳卒中で半身が麻痺した人、腰痛、膝関節痛などで歩行困難な人でも、自身の両足でペダルをこぎ自由に走り回ることができる最先端のチェアサイクル(足こぎ車いす)。

PALRO:

人の顔や声の特徴を認識、記憶し、呼びかけたり会話をすることができる。他にもダンスを踊ったり、クイズやゲームをするなど高齢者福祉施設でも役立つ機能が搭載されている。

ベッドサイド水洗トイレ:

汚物を粉碎し、圧送することにより、細い排水管を実現、これまで困難とされていたベッドサイドへ後付け可能な水洗トイレ。